

桜の木の下で

中村福子

桜のきれいな時だった。村中幸子は、今日も仕事の帰りに、駅から桜並木の続く遊歩道を歩いていった。夕暮れの空に花びらがひらひらと舞う姿は本当に美しい光景だ。咲いて美しく、散っても美しい桜は、幸子にとって実に魅力的な花だった。幸子は、家に帰ると認知症の父親がいることを思うとなかなか家に帰る気にはなれなかった。昨日も、家に帰ると父親の泰司がやってきて、わけのわからないことを言って、幸子の回りにまわりついてなかなか離れなかった。幸子がいらいらして泰司に怒鳴っていると、それを夫の博之にいさめられた。そんなことを思うと、幸子は、もう少し桜の花の美しさを楽しみたいと思った。幸子は遊歩道にあるベンチに腰掛けた。見上げると、桜の枝の先から先まで花がきれいに咲き誇って、幸子の頭の上に屋根のように広がっていた。幸子は、花の美しさにただただ見入っていた。

「幸子さん」

幸子が振り返ると、幸子の家の向かいに住んでいる高橋登美子が立っていた。

「あら、登美子さん、こんばんは、桜がきれいね」

「本当、素敵ですね」

登美子は幸子の横に座った。

「幸子さんは、先生をされているんですよね？」

「ええ、なかなかやめられなくて」

「やめなくてもいいじゃないですか。いつまでも働けるなんてうらやましいです」

幸子は何も言わず登美子を見た。その時、風が吹いて頭の上の桜の花びらが舞ってきた。

「すごい花吹雪、すてきねえ」

幸子が花びらを手に取りながら言った。

「子供のころ、この花びらを糸でつないで首飾り作ったりしたわ」

楽しそうな幸子だった。

「散ればこそいとど桜は目でたけれ、浮世に何か久しかるべし」(*伊勢物語より)

登美子は短歌を口ずさんだ。登美子を見ながら、幸子は別の短歌を口ずさんだ。

「世の中にたえて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし」(*伊勢物語より)

「幸子さんは、その歌の方が好きなのですか？」

「どちらも好きです。どちらも、その通りだと思えますもの」

「そうですね、でも私は、今は『散ればこそ……』の方が好きです」

「そう言いながら、ため息をついた。幸子は黙って、登美子を見ていた。登美子は続けた。「両親が大変なの。浮世に何か久しかるべしっていうけど、両親はいつまで生きるのかな、なんて思ったりして」

「ご両親様と同居されているのですか？ お見かけしたことないように思いますが、お年はおいくつですか？」

「父は八十八、母は八十三です。」

「まあ、うちの年寄より若いわ。うちは、主人の母親が九十八、私の父が九十六です」

「えっ？ そうなんですか？ どちらにお住まいなんですか？ お見かけしたことありませんね」

「一緒に住んでいます。二人とも足がだめで、家の中でテレビ見たりしています」

「ここは？」

「そう言いながら、登美子は自分の頭を指さした。

「主人の母は、頭はしっかりしています。私の父親は、このところ認知症が入ってきていますね。まだらボケっていうんですかね、何でもないとときもあるんですけどね。でも主人が二人の面倒をよく見てくれるの。だからこうして働いていられます」

「そうですね。ご主人様、優しい方なのですね。私の両親は二人とも壊れています。それで、私は仕事をやめました。もともと、会社じゃ私なんてお荷物だったと思いますから、やめると言った時は喜ばれました」

「登美子さんはおいくつなの？」

「五十三です。高校卒業してデパートに就職したんです。初めは、紳士服売り場に配属されて、三十才くらいになって婦人服に回されて、四十五才になって食品売り場に回されたんです。それから、仕事がつまらなくなって、小会社のアパレル関係の会社に向かせてもらったんです。でも、その会社が経営不振になって、また食品売り場に戻されて、でも、若いパートさんがいっぱいいて、会社じゃ若い人がいいんでしょうね、なんかいづらい雰囲気でした」

「よく聞きますね、企業は若い人や、パートさんとか、安く雇える人がいいって」

「そうそう、それです。やり方は陰湿でじわじわとやめてもらいたいオーラを出してくるんです。別に、会社の悪口なんて一言も言っていないのに、君は陰でこんなこと言ってるのかなんていちやもんつけてきて、本当に嫌でした。今だったらセクハラだの、パワハラだのって問題になるところですけどね」

「ご結婚は？」

「していません。紳士服売り場にいた時、お得意さんがいて、その人が私にとっても良くしてくれて。勝手に、私はその人と結婚するのかな、なんて思っていて……でもその人、奥さんがいたんです」

幸子は登美子を見た。横顔だけだが、登美子はなかなかの美人だった。若いころはさぞもてたはずだと思った。

「登美子さん、若いころ男の人泣かせてきたんじゃないのかしら」

「泣かせたかはわかりませんが、男の人からは良くされました。でも、あまりわからなかったんです。男の人のことが……結婚ということにも興味ありませんでした」

「そうなの。登美子さんが気づかなかっただけで、結婚のチャンスはたくさんあったのだと思いますけどね。」

「幸子さんは、お子さんがお二人いらっしやいましたよね？ 男の子さんと、女の子さんですよ。幸子さん一家が引越してこられてから、毎朝、お嬢さんと出かけてましたよね？ 見ていてうらやましかったです」

「そうでしたね、あの頃は、娘は、まだ小学生で、学校までいつも一緒でした。学校の校門に入っていくのを見て、私は、バス停まで歩いて、そこからバスに乗って仕事に行きました。一駅先まで歩いたってことです」

登美子は幸子がとても幸せそうに見えた。

「お幸せそうですね」

「そうですね、二人とも結婚して、今は、主人の母と私の父と主人、そして私の四人の生活です。私の家の平均年齢が八十を超えました」

そう言いながら、幸子は本当に楽しそうに見えた。しばらく会話が途絶えた。春風が心地良かった。風が吹くと桜の枝が揺れ、花びらが落ちてくる。その花びらが、時折、二人の顔にあたって、二人は顔に手をやっては、花びらをぬぐっていた。幸子は気づいたように登美子に言った。

「ご両親様は大丈夫なの？ さっき、壊れているとか言っていたけど……家にいらっしやるのでしょうか？」

「寝てます。夕飯食べさせてから、薬飲ませて、寝かせているんです」

「寝かせているって、睡眠薬を飲ませているってことですか？」

「ええ、医者からは、騒いだりして、手に負えなくなったら飲ませていいって言われているんです」

「そうなの？ そんなことを医者が言うのですか？」

登美子は、その言葉には返事しなかったが、訴えるように話し始めた。

「最初は父親が認知症になりました。同じことを何度も何度も言って、母がそれを無視すると、怒って物を投げたりするらしく、私が仕事から帰ると、母が泣いて私に訴えるんです。無視されているから怒るっていうものだから、それなら、認知症ではないんじゃないかと思っていたんですが……だって、人って無視されたらいい気持ちじゃありませんよね？ でも、私が仕事を休んで家にいた時、父が『どちらさん？』て私に言うんです。その時、母の言う通り、父は壊れているって思いました。でも、まだ母がすっかりしていたので、仕事を続けていたんですけど、母も心労からかちよつと変になって来て、気になるんで、仕事をやめたんです。そしたら安心したんでしょうか、母も認知症が進んできて、今は、二人とも何もわからなくなってきました……」

幸子は、登美子の話を聞きながら、冷静に話す登美子の姿に何か違和感をもった。睡眠薬なんてそんなに飲ませていいものだろうか、登美子の話疑問も感じた。

「幸子さんこそまだお話していて大丈夫なのですか？ 夕飯の支度があるのでありませんか？ お引き止めしてすみません」

「いいえ、気にしないでください。親たちの夕飯はおいてきますから。主人は、私が帰ってから一緒に食べますが、あまり、時間は気にしていいので大丈夫なんです」「幸子さんのところは、ご夫婦仲がいいって評判ですよね？」

「そうですね。でも、私の家もいろいろありました。主人が、体が弱くて、入退院を繰り返して、そんな中で主人の両親と同居して、私は、主人と主人の両親の面倒を見なくてはならず、あまり子供の面倒を見ることができなくて、でも、そのことを主人に言えなくて、一人で悶々としていました。一緒に住んで十年たった頃、主人の父親が亡くなりました。子供にかまってあげられなくて、一時子供が変になったことがありました。かわいそうなことをしましたが、その時は一生懸命子供と向き合いました。何とか横道にそれず育ってくれました。子供たちは、それぞれ結婚して、部屋が空いたので、私の父親を引き取って、一緒に暮らすようになりました。主人は病気がよくなるらずに、休職、復職を繰り返していたのですが、五年前に会社が早期退職者を募った時に依願して退職しました。それから、自宅療養をしながら、年寄りの面倒を見てくれるようになりました。そして、ようやく、今になって、主人にいろいろなことを言えるようになりました」

登美子は幸子の顔を見た。そこには、何かを乗り越えてここまでやってきたという、「乗り越え感」というものを感じた。

「いろいろあっても、ご主人とか、お子さんとかがいて、乗り越えられたのですよね。」

私なんか一人だから乗り越えられるのか、不安です。相談しようにも、兄弟もいませんし叔父とか叔母とかもいませんし……」

「本当に大変な時、家族が支えになっていたのかわからないです。どこかには、支えとしてあったのかもしれないけど、とにかく、生きていくにはどうしたらいいかそればかり考えていました。まだ子供も小さかったし、私は早くに母を亡くしていましたから、父親にも言えないし、誰にも相談できませんでした。結局、自分一人で考えるしかなくて、つらい日々がありました。」

登美子が驚いたように幸子を見ていた。

「家族のことってなかなか人には言えませんがね」

「本当にそうですね。兄弟とか友達がいるとかいないとかではないのですね」

「その通りよ。人の痛みをわかってくれる人なんてそんなにいないですよ。私だって、これまで、いろんな人と付き合ってきましたけど、どれだけわかってあげられていたのかなと思うと自信ないですね。現に、すぐ目の前に住んでいた登美子さんの大変さなんて考えたこともありません。ご両親様がいらしたなんて、それも初めて聞きました」

登美子は何も言わず下を見ていた。その登美子の足元にも桜の花びらが落ちていた。

幸子は立ち上がった。登美子も立ち上がった。二人は、ごく自然に帰り道を歩き始めた。二人とも、なにも話さなかった。登美子は家の前に来ると、幸子にちよつと会釈をして家の中に入っていった。幸子も、登美子に会釈をして家に入って行った。

博之はテレビを見ていた。

「遅くなっちゃったけど、すぐ、ごはんにするね」

そう言っつて、冷蔵庫を開けて、夕飯の段取りをし始めた。料理を作りながら、幸子は登美子のことを話し始めた。

「帰ってくる途中で、向かいの奥さんと会って、しばらく話しこんじゃったの。あの奥さん独身で、認知症になった両親の面倒見てるんだって。そのために仕事をやめたって言っつたけど、働かなくても、両親の面倒見られるなんていいわよね」

博之はテレビを見ていて、聞いているんだか、いないんだかわからなかったが、幸子も、そんなことは気にならなかった。しかし、そこに泰司が部屋に入ってきた。

「幸子、夕飯はいつくれるんだい、お腹がすいたよ。」

「やだ、お父さんたら、夕飯は置いて行ったじゃないの。朝、部屋に持って行って、それから私は仕事に言っつたのよ。三食置いて行っつたわよ」

「幸子、よしなよ、食べるものなら何かあるだろう。なかったら僕の夕飯出してあげなよ」
博之が幸子を諭すように言っつた。幸子はうなずいて、博之に出すはずの夕飯を持って、

泰司を部屋に連れて行った。それから、幸子はリビングに戻ってきた。

「お父さんたら、私が置いて行った三食をすっかり食べちゃったの。よくそんなに食べられるもんだわ。」

「そんな言い方しないでいいじゃないか。お父さんはわからなくなってるんだろう。仕方ないよ」

博之はいつも泰司をかばった言い方をする。自分の母親の照子とはほとんど話もしないみたいだが、泰司の話し相手にはなっているようだ。話し相手と言っても認知症の泰司とちゃんと話ができているとは思えない。

「どうして私のお父さんには優しくしてあげて、自分の母親には優しくしてあげられないの？」

「おふくろはしっかりしているじゃないか。なんか言えば、私のことは心配しないでって、かわいげないからさ」

いつも博之はそう言って、話を終えてしまうのだった。幸子も話をやめて、夕飯をテーブルに並べた。二人は向かい合って夕飯を食べ始めた。

「今日は医者が来る日だったでしょう。おじいさん、おばあさんはどうだったの？ なんか言われた？」

「特に何も言われなかった。お父さんもおふくろも、大丈夫じゃないかな」

親たちは、それぞれ、同じ要介護四だったので、二人とも在宅医療と在宅リハビリを頼んでいた。月二回、医者谷口が二人を見に来ていた。幸子はほとんど毎日仕事で外に出かけているので、博之が、いつも医者から話を聞いてくれていた。博之も、何年か前に病気で死にかかって大変な時があったが、今は落ち着いて、療養生活をしている。

幸子にとって博之は生きていてくれればよかった。もう、あんなつらい思いを博之にしてもらいたくなかった。今、静かに二人で日常生活が過ごしていることに、幸子は幸せを感じていた。

夕飯を食べ終わって、後かたづけを終えてから、幸子は博之に「買い物に行ってくる」と言って外に出た。すっかり暗くなっていたが、月明かりに見える桜は、また一段ときれいだった。桜並木の間、間には粋な提灯が飾られていて、風情があった。幸子はさっきの桜並木とは違う趣を楽しみながら、遊歩道をまた歩き始めていた。時折、桜の花びらが舞い落ちて来る。幸子は、花びらを手に取っては、それをまた捨てて、そんなことを繰り返しながら歩いてきた。しばらく歩いて、幸子は遊歩道のベンチに座っている女性の前で足を止めた。さつき会って話をした登美子がベンチに座っていた。

「登美子さん」

登美子は驚いたように幸子を見た。

「幸子さん、どうしたのですか？」

「仕事が忙しくてなかなかゆつくり買い物できないので、明日は仕事が休みなので、これから買い物に行くの」

「こんな時間にですか？ 大変ですね」

「今頃になってスーパーに行くとは、いろいろなもの安売りされているから、かえって助かるのよ。仕事が休みの時は、のんびりしたいですからね」

「そうなんですか。こんな時間に買い物したことないから、わかりませんでした」

「登美子さんは何しているの？ まだ、ご両親様は寝てらっしゃるの？」

登美子は幸子の質問には答えなかった。幸子は、登美子の横に座った。

「登美子さんは、働かなくても生活は大丈夫なのね。いいわね」

「ええ、父親がお金をたくさん貯めこんでいるから、今は、それを使っているのです。お金が無くなったら、あの家を売ろうなんて思っています」

「登美子さんの家は豪邸ですね。二百坪はあるでしょう？ 少しずつ小出しで売ればいいんじゃないの」

「そうですね、あまり税金がかからないようにしようと思っっていますけど。どうなることやら。幸子さんのお家も立派じゃないですか。もう建って何年になりますか？」

「ちょうど二十年になります。主人の両親と一緒に住むときに建てました。今年でちょうど二十年になります。本当は、定年になったら、退職金でローンが終わるはずでした。でも、予定通りにはいきませんね。主人が病気になったことが誤算でした。でも主人だっただけで病気になるわけではありませんし、売ることも考えたりしましたけど、売ってもローンしか残らないという現実で……頑張るしかないって思っ、今までやってきました。あの家は主人と私の二人で作った家で、私には、宝なんです。主人は、二人とも定年になったら、売って田舎に行きたいか思っていたみたいですが、今はとにかくあの家を残そうと必死なの。まあ、何とかなりそうになってきましたけど」

幸子も、今まで人に話したことなかったことを話し始めた。

「登美子さんは、自分に兄弟がいたほうがいいようなことを言っていたけど、兄弟って何だろうと思うことがよくあるわ。私は弟が一人いるんだけど、弟は都会の生活が合わないって北海道に行ってしまったって、ほとんど付き合っていないの。時々、私には兄弟がいたんだって、驚くことがあるくらい遠い存在よ。主人には妹が二人いるんだけどね、これがまた曲者よ。」

「曲者って？」

「変な言い方だけど、女の子って、男の子より気が付くことが多いわよね。親のこともいろいろ気づくんでしょうね。こうしたら、親にとっていいんじゃないかと思うことを勝手にするのよ。まるで、自分たちだけが親を心配しているんだっていうようにね。それが、いらいらしちゃうのよ。親の面倒見ているのはこっちなんだから、私たちと親がうまくいくように考えてくれてもいいと思うんだけどそういうことが全くないのよ。親が私の悪口を言えば、なんとひどい嫁くらいにしか思っていないんじゃないの。本当にやだわ」

登美子は、いつもは穏やかに見えたが、ずいぶん興奮していて、別人のように見えた。話してみないと、人ってわからないもんだなど、登美子は、そんなことを考えながら、幸子の話を聞いていた。

「あら、私だったら、ごめんなさい。でも主人の妹たちにはずいぶん傷つけられました。たまに来て言いたいことを言って。でも主人も私と同じ気持ちでした。親と一緒に暮らしていないから、暮らしている人の気持ちかわからないんだって。あいつらは妹なんて思っていないから幸子も気にすることないって、いつも私を慰めてくれました。」

「みんないろいろあるんですね」
「そうよ、何もない人なんていないわよ。みんな、我慢したり、こうやって発散したりしているんじゃないのかしら。登美子さんは発散しているの?」

「私は、あまり友達もないし、さっき言ったように兄弟も親戚もいないので、人と話すってことないです。発散出来るところがなかったように思います。幸子さんのこと時々見ていていつか、お話してみたいと思っていました。」

「そうなんですか、どうして?」

「幸子さんの家って、よくお客様がいらしますよね? 教え子さんですか? 玄関先で『先生、先生』っていう声が聞こえてきましたので、それで、幸子さんは先生なんだって思いました。皆さん、楽しそうで、うらやましいなって思っていました」

「みんな酒飲みで、酔っぱらって大声出しているから、聞こえたのね」
幸子は嬉しそうな顔になった。さっきとは、全くの別人になっていた。

「教え子さんのこと話しているとお話しそうですね」

「ええ、あの子たちは私の大切な宝物ですから。主人は、私が、教え子をとても大切にしているのを感じて、それで、結婚しても、仕事を続けさせてやりたいって思ったらしいです。協力してくれて、感謝してます」

「素敵ですね、幸子さんたちご夫婦……私も結婚していたらよかったです」

「でも、私は、さっきお会いした時の登美子さんのお話聞いていて結婚というより、ど

うして、もっと、お仕事をきわめなかったのかなって思います」

「きわめなかったって？」

「さっきのお話では、高校を卒業されてから、デパートにお勤めされたって、おっしゃってましたよね。その紳士服売り場で、よくしてくれていた男の人と結婚するかもしれないとも言っていましたよね」

「ああ、それは私が勝手に思っていただけです。でも私は、さっきも言いましたけど、男の人に興味なかったのかもしれませんが。結婚ということをあまり考えなかったです」

「でも、周りの人からは、登美子さんは魅力的に思われていたのではないですか？ たぶん、その時登美子さんは、自分の好きなことをして、生き生きしていたんじゃないかしら。きっとその男の方は登美子さんと結婚したかったのではないかしら」

「でも、その人には奥さんがいらしたんですよ。そんなことありませんよ」

「もしかしたら、奥さんと別れても、登美子さんと結婚したいと思っていたかもしれないよ」

「そんなこと……」

登美子は若い女性みたいに恥ずかしそうにしていた。幸子は、登美子は案外かわいい人なのかと思った。しかし、幸子は、登美子に対して厳しい口調になっていた。

「結婚する気がなかったのならどうして仕事をきわめなかったのですか」

登美子は幸子の質問の意味がわからずに黙っていた。幸子はさらに続けた。

「きっと、そのときは、登美子さんは、仕事が楽しくて一生懸命だったんだと思うの。そういうときの人間は魅力的なものよ。結婚する気がないんだったら、もっと、もっと、一生懸命仕事をやっていたらよかったんじゃないのかなって思ったの。食品売り場が嫌で、アパレルの会社に出向させてもらったって言ってたけど、アパレルがよかったんだったら、食品売り場に戻らないで、その時、いつそアパレルの会社に変わればよかったんじゃないかしら。もともと、登美子さんの家はお金があったみたいだし、嫌な仕事にしがみつくこともなかったのでしょう……」

「もう、昔のことですから」

「そうね、昔のことね。でも、そのときに自分のやりたいことができなかったことが、今の生活に影響しているのではないかと思うんです。私のことをうらやんだりするのは、自分のやりたいことができなかったということが、今もどこかで引きずっているのではないでしょうか。私だって、今の落ち着いた生活が送れるまでにはいろいろなことがありました。私は、小さい頃から教員になりたいと思っていました。それは私の夢でし

た。でも、私が高校生だった時は、高校を卒業するほとんどの人が就職する時代でした。大学に進学する割合は少なかったのです。まして女性が大学に行くなんて本当に少なかったのです。私の通っていた高校では、当時三百人以上も生徒がいました。女子校でしたけどね。その中で四年制の大学に行ったのは五名でした。そのほかの人はほとんどが就職でした。私の家は自営業だったのですが、父が、大学なんか行かないで家を手伝えと言って、大反対でした。母も、女が大学に行ったら嫁に行きそびれるって、やはり大反対でした。親戚の伯父や叔母も、女が大学なんて、大臣か博士にでもなるつもりなのって嫌味なこと言って、本当に大変でした。私は、先生になりたいんだっていうんだけど、先生になんてなったら、お嫁に行かなくなるよって、もう回りから猛反対でした。そしたら、高校二年の時、父が事業に失敗して倒産したのです。今度はお金がないから、高校だけは何とか出してやるが、大学にはやらせられないって言われて、それで、私はアルバイトを初めて、大学に行くお金を貯めました。両親は根負けして私の好きなことをさせてくれました。それから私は大学に行って、卒業してから教員になりました。小さい頃からの夢だった教員を今も続けていられることは私の誇りでもあります。でも、働きたいから働いていると思っていたのが、働かなければならないから働いているっていうのが実情になってきて、それからは、自分の思うように働けなくなつて、そのことですいぶん悩みました。守らなければならぬものがあると、思い切った仕事ってできないですよ。夫に相談したら、思い通りの仕事をさせてあげられなくてごめんねって謝られて慌てました。それからそういうことは一切夫に言いませんでした。そして、その時、その時、自分ができるところを一生懸命やっついこうと思つて、今まで一生懸命やってきました。私は思うんです。人は、生きて甲斐のある人生を生きなければいけないって。登美子さんは、親のために仕事をやめたようなことを言っていましたよ。本当にそうでしょうか？ 私たちが生まれた時、親は私たちにいろんなことをしてくれました。ほとんどどの親は子供のために一生懸命になります。それは無償の愛です。でも私たちは大人になるにつれて親がしてくれたことを忘れてしまいます。老いた親を子供が面倒を見ることは当たり前のことだと思えます。それは親が子供の面倒を見るのが当たり前のように。そして、その当たり前のことをするのを、なんか、大変なことをするように考えるのはおかしいと思うんです。私は自分の生きがい仕事を求めました。さつきからお話しているように、教育に生きたいと思つて教員になりました。今でもその気持ちを捨てられなくて働いています。自分の生きがいとする仕事をやらせてもらうために、やるのが当たり前のこととは当たり前前にやりたいのです。つまり、自分がやらなければならないことをきちんとしてやるから、自分が生きがいとすることができると

と思うんです。私の主人は、音楽、映画、本といろいろな趣味があります。それが主人の生きがいなんだと思います。主人も、自分の母親だけでなく、私の父親のこともよく面倒を見てくれます。私ができないことを主人はやってくれているのです。だから主人も自分が楽しいと思うことを存分にできるのではないのでしょうか？ お互いに、自分ができることを、当たり前のごとくのように、ごく自然にやっています。だから、自分たちの生活に何の不満もありません」

登美子は、幸子の言っていることがわからなかった。何も言わずに幸子を見ていたが、幸子も自分の言いたいことをどう言ったら、登美子に伝わるのか、だんだんと必死になつていった。

「登美子さんは、親のために仕事をやめたのではなくて、やめたくてやめたんじゃないかなって思うんです。自分が生きがいとするものがないことを、親の面倒のためだと、本題をすり替えてしまっているのではないかと思うのです。結婚していないとか兄弟がいらないとかそんなことは大きな問題ではないのです。だから登美子さんに、今からでも、自分の生きがいを見つける努力をしてほしいと思うのです。どんなことでもいいのです。仕事だとしたら、一生捧げたいと思う仕事を見つけるとか、販売職ならトップセールスになるとか、絵とか音楽、文学、などの趣味があれば、そのことに一生懸命になるとか、何でもいいのです。そういうものを、自分で見つける努力もしないで、親のために、自分の生活が犠牲になつているようなことは言うべきではないんじゃないかって思うのです。登美子さんは、今、何かやりたいと思うことはありますか？ なんでもいいのです。自分を生き生きとさせるもの、こういうことをしていると楽しいって思えるものはありませんか？ そりゃあ、何でもいいって言ったって、勿論、『人に迷惑をかける』『人を殺す』そんなことはだめよ」

「『人を殺す』ですって」

「だからそんなことはダメだって言ったでしょう。極論だけど、そんなことを生きがいなんていう人がいたら、そんなものは受け入れられないってことよ。ほら、いつだったか『人を殺してみたかった』なんて言って、人を殺した人がいたわよね。そんなことは、許されないことよ。そりゃそうでしょう」

幸子が熱く語り始めそうになったとき、急に登美子が大声で泣きだした。幸子はびっくりして、登美子を見た。登美子は、体を震わせて泣いていた。

「どうしたの？ ごめんなさい、私ったら急に、何かを語りたくなくなってしまって、自分の言いたいことばかりになってしまって、ごめんなさいね」

幸子は登美子の体をさすりながら、ただひたすら謝った。その時、登美子が小さい声

で、恐ろしいことを言った。

「私……両親を殺しました」

「えっ?」

「両親を殺しました」

幸子は胸がどきどきしてくるのがわかった。

「何を言ってるのかわからないわ。どういうことなの?」

「両親を殺したのです」

そう言っただけで幸子は泣いていた。幸子は、気持ちが悪くなりそうなくらい、心臓がたかなっていた。ようやく、幸子は、登美子に聞いた。

「睡眠薬を飲ませたってこと?」

登美子はうなずいた。

「本当に亡くなっているの? 眠っているだけなのではないの?」

「首を絞めました。体が冷たくなっていました。汚物も出て……」

「今どうしているの?」

「さっき、幸子さんと別れて家に入ろうとしたのですが、怖くて入れませんでした」

「ご両親はお二人とも認知症っておっしゃってましたね」

登美子は返事もせず、声を震わせて泣いていた。幸子は登美子の背中をさすりながら言った。

「警察に電話しましょうか? いいですか?」

登美子は泣きながらうなずいた。幸子は、携帯電話を出して、警察に電話した。そして、登美子の話を伝えた。

「警察が、ここに来るそうよ。ここで待っているようにって」

二人は、お互い抱き合うようにして警察が来るのを待った。警察が来るまでに少し時間があった。幸子は、登美子の体を支えながら言った。

「登美子さん、大変だったのね。すぐ前に住んでいながら何もわからず……ごめんなさいね」

登美子はただ泣いていた。

「さっきも言ったように私の父も認知症で、まだ、登美子さんのご両親に比べれば……」

幸子がそう話しかけた時に、パトカーが止まった。警察官が車から出てきた。幸子は登美子を抱きかかえるようにして立ち上がって、警察官を見た。

「高橋登美子だね?」

登美子はうなずいた。幸子は、警察官に連れられてパトカーに乗り込む登美子の姿を見ていた。何とということが起きたことだろう。幸子はベンチに倒れるように座った。体が震えるのがわかった。そこに、幸子の携帯が鳴った。博之からだだった。博之は、向かいの家で起きたことを知ったようだ。ずいぶん早く情報が流れるものだと、幸子は驚いた。博之は、さつき、幸子が登美子と会って話しこんだと言ったのを、ちゃんと聞いていたようだ。それで、心配になって、幸子の携帯に電話をしてきたのだった。どうやら、家の前には警察や報道陣や近所の人たちでいっぱいになっているらしい。博之は気をつけて早く帰ってくるようにと幸子に言った。幸子は電話を切って、家に向って歩き始めた。買い物をしなければならなかったことも忘れていた。幸子は、今、登美子と話していたことは夢ではなかったかと思った。なぜ、今日、登美子に会ったのだろう。偶然というにはあまりに割り切れない。自分が話していることを、登美子はどんな思いで聞いたのだろう。家のそばまで行くと、家の回りに人だかりがしていた。幸子の姿を見て隣に住む穴水が走ってきた。

「奥さん、大変。高橋さんの娘さんが両親を殺したんですって」

その声は異常に興奮した声だった。『殺す』なんていう言葉は、ドラマの中だけのことのように思える言葉だ。興奮するのも無理はないと思った。幸子も、まだ、心臓がどきどきしていた。家の前の通りには通行止めの紐がはられていた。細くなった道路をそつと歩いて、幸子は家に入った。博之が迎えてくれた。幸子は、博之の顔を見ると、気が緩んだのか泣き出した。博之は何も言わず泣かせてくれた。どのくらい泣いていたろう。ようやく、気持ちが落ち着いてきた。博之が温かい紅茶を入れてくれた。幸子はテレビをつけようとして、リモコンをとった。しかし、博之は、「テレビはつけない方がいい」と言って、幸子からリモコンを取り上げた。幸子は、それが何を意味しているかわかった。幸子は、登美子と話したことを博之に話し始めた。時々、思いが詰まって言葉が途切れたが、ようやく話し終えた。博之は、幸子の背中をさすりながら言った。

「登美子さんもよくよく悩んでいたんだね。うちも他人事ではないよね。」

幸子は博之の顔を見た。博之は幸子の手を握って優しく言った。
「幸子のお父さんだって、全く分からなくなるのも時間の問題さ。僕のおふくろだって、いずれお父さんと同じさ」

「本当にそうね。でも登美子さんと違って私たちは二人だから、二人で支えあってお互いの親を見て行かれるけど、ひとりだったらきついよね。私一人だったらやっていかれるのかわからないわ」

「幸子はよくお父さんにつらくあたってるよね。それができるうちはまだいいんだろう」

ね。本当につらくなったら何も言えなくなるのかもしれない。親の面倒は、経験したことがない人には分からないことだ。だからと言って、殺したらだめだ、すべてが水の泡さ。登美子さんのこれまでの苦労は水の泡になってしまったってことさ」

「幸子、幸子」

泰司の怒鳴る声が聞こえたと思ったら、泰司が部屋に入ってきた。

「外がうるさくて眠れないよ、何があったんだ。見てきてくれよ」

幸子は、泰司には、この出来事を話したくなかったので、一緒に泰司の部屋に行った。泰司と他愛もない話をしながら、外が落ち着くのを待った。幸子は泰司をベッドに寝かせた。泰司の体を優しく叩きながら、子供のころの話をした。泰司は穏やかな顔になって行った。幸子の心も不思議に穏やかになってきた。子供のころ親がこうやって自分の体を優しく叩いてくれたのを思い出した。

「さっちゃん、眠れないのかい？ トントントンしてあげようか」

「トントントンして」

親が幸子の体をトントントンしてくれて、幸子が眠るまで、歌を歌ってくれたり、お話をしてくれたり、そんなことを思い出した。親の優しさが胸に迫ってきた。涙が出た。してもらったことは忘れてしまうんだ。そんな思いが幸子の胸に沸き上がって、さつき登美子に偉そうに話していた自分が恥ずかしくなった。幸子の父親はいつの間にか眠っていた。気が付いたら外の騒ぎもおさまっていた。幸子はリビングに戻った。博之は幸子を待っていてくれた。

「お父さん眠ったのかい？」

「うん……おとうさんの背中をトントントン叩いていたら、子供のころのことを思い出して涙がでてきたわ」

博之は何も言わず幸子の話を聞いた。

「親は小さいときには本当にかわいがってくれた。そう思うから今親の面倒が見られるんだと思うけど……でも親が年をとってから、親は本当に私のことを思ってくれているのか疑問に思うことがたくさんあった。教員になって一生懸命仕事して、家に帰ると親が私の帰りを待っていてね、『幸子、何時だと思っっているんだ、こんな遅くまで働いてみっともない』って怒鳴るの。私がなんでみっともないのって聞くとね、まるで親が子供に食べさせてもらっているみたいだって言うの。お父さんは事業に失敗してからひがみっぽくって、本当に嫌だった。お母さんもその時はまだ生きていて、親がお前を嫁にやらないみたいに思われるとかいうの。今だってさ、お父さん、毎日のように、お前が病気になったら俺はどうなるんだって言うの。私のこと心配してくれてるんじゃないの」

よ。自分のためなのよ。私、親のために生きてるのかな」

幸子は涙が止まらなくなっていた。

「お父さんも不安なんだよ。幸子には感謝していると思うよ。」

博之の言葉は幸子の気持ちを穏やかにしていた。幸子にとって博之はなくてはならない人だと思った。博之は五年前、訳の分からない発作を起こして一週間意識不明になった。ちょうどその頃、博之の会社が早期退職者を募った。博之はその話にのった。退職金も倍近くもらうことができた。それで住宅ローンもかなり払うことができた。まだ、少しローンは残っているが、それもあともう少しになった。そんなことを考えているうちに幸子の気持ちはすっかり落ち着いていた。博之は、もう寝ると言って部屋を出て行った。

幸子は、今日一日のことを考えていた。人生には、信じられないことが起こるものだと思った。幸子は、静かに部屋を出てそと玄関の戸を開けた。向かいの家は、まだ電気がついていた。入口には、警察の人が立っていた。

幸子は外に出た。月あかりで空が明るかった。桜の花びらが音もなく舞っていた。貞心尼の短歌が幸子の頭をよぎった。

我も人も嘘もまことも隔てなく照らしぬきけり月のさやけき(*歌集「はちす露」より)

「登美子さん」心の中で、幸子は、登美子の名前を呼んだ。幸子は、自分のことばかり話して、知らずに、登美子を追いつめてしまったような罪悪感に襲われた。幸子は老いていく親の介護という、重い現実を思った。きれいごとではない人生が幸子を待ち受けているような怖さを感じた。それは自分の力ではどうにもならないことだと思った。そんなことを思いながら、幸子は足元に落ちる桜の花びらをいつまでも見つめていた。

翌朝、幸子は仕事が進みだったのでゆっくり起きた。階下では義母の照子が洗面台で何かしている音が聞こえていた。幸子は、朝ご飯をもって行かなければと思って起き上がった。博之はまだ寝ていた。

幸子は簡単な朝ご飯を作って階下に持っていった。照子はテレビを見ていた。

「幸子さんは、前の人とはお付き合いしていたの？ 昨日テレビを見てびっくりしたわ」

「いいえ、ほとんどお会いしたこともないし、お年寄りがいたことも初めて知りました」

「そう、ならいいけど、本当に恐ろしいわ。実の親を殺すなんて」

義母の言葉に、幸子は登美子のために何か言ってやりたい気持ちになったが、黙って部屋を出た。幸子が二階に上がろうとしたときに、照子の大きな声が聞こえた。

「そうなのよ、家の前に住んでいる人よ。いま、幸子に聞いたたら、幸子は付き合っていないみたいよ。付き合ってたら、お互いに親の悪口でも言いあっていたかもね」

幸子は、照子が昨日のことを、娘と電話で話していることが分かった。幸子のため息をついた。そして、何も言わず、リビングに戻った。博之が起きて座っていた。博之の顔は怒っていた。

「おふくろは、妹に昨日のこと話してるんだらう？ 自分がどんなに大事にされているかわからないのかね。親を面倒見るのは、大変なことなんだって、幸子も言ってるんだらういいんだ」

「そんなこと……」

「僕が言ってくる」

そう言っ博之は部屋を出ていこうとしたが、幸子はそれを止めた。

「お願い、やめて。何か言えば、倍になって私に返ってくるんだから。そのことで、どれだけ私たちが嫌な思いをしてきたことか」

「だからって、前の家で起こったことを面白半分に言うなんて許せないよ」

「そうだけど、言っわかる人じゃないもの、博之さんだっそう思っでしよ」

博之も、ようやく気持ちを落ち着かせたようだった。それから博之は幸子に言っ

「なんか調子悪いなっ思っ目覚めたら、おふくろの怒鳴る声があったから、よけい具合が悪くなっ」

「具合悪いの？」

「胸が苦しいような気がして、目がさめた」

「今はどうなの？」

「今もちょっと気持ちが悪いけど、大丈夫だよ」

「ご飯は？ 食べる？」

「いいや、コーヒーくれないか」

そう言っ、夫は新聞を読み始めた。幸子は何か嫌な予感がした。このところ、博之は具合悪そうにしていることが多かつた。手を胸に当てて、座っていることが多かつた。しかし、そのうち、好きな音楽を聴いて楽しんでるふうにもみえたので、そのままにしてしまっていた。幸子はコーヒーを差し出しながら、博之に言っ

「医者に行っみたら？」

「医者へは二週間後に行くことになってるから、その時に話してみるよ」

「そうしてね。心配なもの」

幸子はそう言いながら、部屋の窓を開けた。登美子の家の庭に咲いている桜の花びらが風に舞っていた。

「登美子さんの家の桜もあんなに満開になってるわ」

「そう言えば、駅に続く桜並木もきれいなんでしょう？」

「ええ、今が見ごろよ」

「そうか、一緒に行ってみようか？」

「具合大丈夫なの？」

「大丈夫」

幸子は博之と桜が見られるなんて嬉しいと思った。この所、博之は外に出たがらなかったからだ。幸子は、博之の手を取って、いそいそと階下に降りて行った。階段の横に照子の部屋があったが、気づかれないようにそと外に出た。幸子は博之の手を取って歩き始めた。博之と二人で桜の花が見られることが嬉しくてたまらなかった。少し歩くと目の前に桜並木が見えてきた。見事に咲き誇った桜に博之は驚いていた。

「きれいだ。今が見ごろなんだろうね。カメラを持ってくればよかった」

「そうね、私も携帯置いてきてしまったから写真撮れないわね」

「まあ、いいよ。どこか座ろうか」

幸子は博之と二人で並んでベンチに座った。二人はしばらく何も言わず桜を見ていた。夕暮れの桜、夜遅くの桜、朝早くの桜、時は変わっても桜はきれいだった。幸子は本当にきれいだと思った。

「幸子は花が好きなんだね」

「小さい頃から好きだったわ。小さい頃は山吹もきれいだったのを思い出すわ。これから花がきれいな季節で、この道を歩くのが楽しみよ」

「僕も山吹が好きだった。桜はすぐに散ってしまうけど、長くきれいに咲いている花もあるよね。あそこの下に咲いている花はしゃがだるう？　こんなところにも咲くんだね」

「そうだわ、しゃがよ。これからいい季節になるわ」

幸子は笑いながら博之を見た。博之は手で胸を押さえて苦しそうに見えた。

「具合悪いの？　どうしたの？」

博之は立ち上がった。幸子も立ち上がった。博之は何も言わず家に向かって歩き始めた。博之は、家に帰ると少し休むと言って寝室に入って行った。

登美子の事件の話はマスコミに取り上げられることはなかった。幸子は何かホッとするものを感じた。誰にも分らない苦しみを登美子は背負っていたのだ。何もわからない者がとやかくいうことではないと幸子は強く思うのだった。

それから二週間が過ぎた。博之は病院に行った。そして、病院から帰ってきた博之は、幸子に医者から言われたことを話した。

「末期がん？　そんな……嘘でしょう？」

幸子は驚いて聞き返した。

「もう治療の余地はないんだそうだ。このまま何もしないで、死を待つと言うことらしい。まあ、僕たちの子供は二人とも立派に育ってくれて、それぞれ結婚もして自立してくれたわけだし、僕は何も思い残すことはないよ」

「そんな……おばあさんは？ おじいさんは？ 私一人で見るってこと……」

「幸子、申し訳ない。それだけは申し訳ない、ごめん」

幸子は返す言葉もなかった。幸子はいたたまれず、買い物に行くと言って外に出た。幸子の足は緑道に向かっていた。桜並木はほとんどが葉桜になっていた。桜の季節は本当に短いと思った。幸子は、まだ少し桜の花が残っていると見つけて近くのベンチに座った。そこは二週間前に博之と一緒に座ったベンチだった。幸子は、博之のことを思った。あんなにいろいろな病気をして、そのたびに大きな病院に行っていたと思うのに、なんで博之の癌がもっと早くわからなかったのだろうと思った。いまさら考えても仕方ないことだ。幸子はまた緑道を歩き始めた。自分はこれからどうやって行くのだろう、幸子は不安でたまらなかった。博之が亡くなったら、自分一人で、二人の年よりの面倒を見なければならぬ。登美子は認知症になった両親の面倒に疲れて二人を殺してしまった。夫は、登美子は大変だったと思うが殺したらすべては水の泡と言っていた。登美子のように追い詰められることがあるのだろうか。いろいろな思いが幸子の胸に押し寄せた。

桜の花は新しい人生の始まりだ。入学式の歓迎の辞や答辞などの冒頭によく使われる。「満開の桜の花にむかえられて……」という文章が思い出された。今の幸子にとっては何の始まりなのだろう。耐えられない思いが幸子の胸に沸き上がった。幸子は顔を覆った。涙を拭う手に桜の花びらが舞い落ちてきた。桜の花びらがついた掌を幸子は見つめていた。とめどなく涙が流れた。地面に落ちる涙を見ながら、幸子は、それは幸子にとって、先の見えない、新しい生活の始まりだと思った。歩くしかないのだ。葉桜になっても、なお咲き続ける花のように、自分も最後までしっかり生きなければならぬと幸子は思った。幸子は立ち上がった。早く博之のもとに帰らなければと思った。一日でも、一時間でも、一分でも長く博之といえるのだ、葉桜になった木々が風に揺れる音を聞きながら、幸子はただ前に向かって歩いた。